

文化・文芸

✉bunka@asahi.com

月曜～金曜掲載

哲学って「使える」の？

鷲田清一さん 明治学院大で特別授業

哲学は本当に「使える」ものなのでしょか。本紙で「折々のことば」を連載中の哲学者・鷲田清一さんが14日、明治学院大学(横浜市戸塚区)で、学生からの問いに答える特別授業に臨んだ。社会でどう生きていくべきかに迷う等身大の質問が次々に寄せられ、対話は3時間半に及んだ。

同大で教える作家の高橋源一郎さんが、ゼミの特別企画のゲストとして鷲田さんを招いた。約40人の学生たちは、事前に著書3冊(『哲学の使い方』など)を読んでいた。この日を迎えた。

「日本を代表する哲学者で、僕の1個上のお兄さんです」。高橋さんが紹介して、授業は始まった。鷲田さんが冒頭で説いたのは、哲学には「僕らがこれから生き延びていくため」の大事な役割



鷲田清一さん(手前)の授業を受ける学生たち(いずれも鬼室黎撮影)

「生き延びるための方向感覚つく」



授業をする鷲田清一さん

がある、ということだ。暮らしてシステムを、ゼロから立ち上げ直さなくてはいけない時代。手放してよいものは何で、はずせないものは何か。それを見極めるための方向感覚は、哲学やアートによって身につけられる、と語った。

質疑応答で初めに発言したのは、大学院生の林靖英さん(27)だ。「今の大学は『どうお金を稼げるようになるか』で授業が組み立てられていて、グズグズする時間などないのでは？」

鷲田さんは笑顔で答えた。「自分が納得して潮時だと思ったら大学から消え、足りなければ復帰する。それぐらい自由な大学の例も海外にはあります。卒業が就職のパスポートというだけでは、みじめたらしいじゃないですか」

「私は去年休学しました」と語ったのは加藤萌々さん(21)。3年生になると、すべてが就職を中心に回るようになる。「前提のようにされているけれど、なぜ社会に出るのか、なぜ格差や紛争が問題なのか。それさえ分からないのに、急いで進まないで」と感じたという。そんな「わからない」自

れた。だが、「深く考えることは、無呼吸で潜り続けるように、すぐ苦しい」。

鷲田さんは「潜るばかりでなく、水平に奥行きを増していくことも『深さ』。考えることを潜水でなく登山にたとえれば、見晴らしのよい場所に出て深呼吸できる喜びがある」と答えた。

高橋さんは「空気の少ないところを通過しないと空気のありがたみは分からない。人間には苦しみを感じる能力があると考えてみては」と付け加えた。

学生団体「SEALDs」の活動に参加しているという林田光弘さん(24)は、周囲に尋ねているという質問をぶつけた。「鷲田さんにとつてのデモクラシーとは何でしょうか」

鷲田さんは「民主主義は流動的なもの。社会が過剰に統合されている時は『異なる』ことをベースにした民主主義になるが、今のようにながれるか』が大事」と答えた。

「なぜ哲学者になろうと思ったのですか」という質問も。鷲田さんは学生時代にキルケゴールなどを読んだ経験を振り返った。

「さっぱり分からなかったけど、人の心をわしづかみにする言葉が散らばっていて、『この言葉について考えたら自分の世界が変わる』と思ったんです」

特別授業の詳細は年内にも岩波新書として刊行される予定だ。ほかにも複数の著名講師が招かれ、それらも盛り込まれるという。

(編集委員・塩倉裕、高重治香)